

2020年11月1日 礼拝説教要旨

詩編講解説教34「豊かさとは」

詩編34：2～11、マルコ14：22～26

第34編の見出しには次のようにあります。「ダビデがアビメレクの前で狂気の人を装い、追放されたときに」（1節）この話はサムエル記上第21章のところに出てきます。巨人ゴリアテを討ち取ったダビデはサウルから妬まれ命を狙われ逃げておりました。ガトという国のアキシシュという王のところに逃れたのですが、アキシシュの家臣がダビデの人気のあることを王に伝えます。「サウルは千を討ち、ダビデは万を討った」そういう話を聞くと王はやはり警戒するわけです。この男は自分の王座を狙っているのかもしれない。そこでダビデは王の警戒を解こうと王の前でわざと狂気の人を装うという話です。

わざとそういう人のふりをする。ダビデにとってそれは身を守るとはいえ、やはり恥ずかしいことでありました。6節に「辱めに顔を伏せる」とあります。これは顔を赤らめるという言葉です。恥ずかしくてしょうがない。穴があつたら入りたい。本当はそういう心境だったのでしょう。挙げ句の果てに王から変人扱いされ、追放される。屈辱的な経験です。でもそのことでダビデは何かを感じ、何かを学んだということは言えないでしょうか。

9節に「味わい、見よ、主の恵み深さを」とあります。これは詩編の中でも印象深い言葉の一つでして、例えば、この御言葉が聖餐式の時に読まれたりいたします。口語訳の「主の恵み深きことを味わいしれ」で憶えておられる方も多いでしょう。この「味わう」という言葉は、実は1節の「装う」という言葉にも通じていまして、経験によって知るという意味があります。誰かの真似をしたり、装うことで、その人の気持ちを知る。経験によって知るのです。ダビデがわざと狂気の人を装い、その結果、屈辱的な扱いを受けた時に、彼は何を感じたのか。それはやはりそういう屈辱的な扱いを受けている人たちの気持ちが分かるということではないでしょうか。人から屈辱的に扱われることを経験的に知ったのです。これはダビデにとって貴重な経験でありました。

誰かの立場に身を置いて初めて見えてくることがあります。ただ自分の立場だけだとそれは偏った見方になります。人に共感したり、相手の気持ちを慮るためには、その立場に、同じところに立つこと。それはとても難しいことですが、相手を知ろうともしないで、ただ自分の考えを一方向的に押し付けているならば、物事に進展はありません。今の社会はこのコロナ禍にあって、ますます人と人との関係が分断され、相手を慮ることができない社会になりつつあります。共感するのではなく、敵か味方かに二分され、相手を中傷し、非難するばかりです。どこかの国の大統領選挙のような構図になっている。わたしたちの国でも「多様性」と言いながら自分に批判的な声には耳を傾けないで排除していく傾向にあります。それではいけないと心のどこかでは思っているけれども、歯止めが効かないのです。そこに人間の罪の現実があります。

詩編第34編の一つのキーワードが「貧しい人」という言葉です。3節と7節にあります。この貧しさは、物質的な貧しさというよりは、心の貧しさ、自分を空しくすることを意味しています。ある翻訳は「へりくだる者」と訳します。このへりくだりは自分を低めて、相手を理解しようとする心です。共感する心です。ですからこの貧しさは本当は豊かなのです。貧しさが豊かさという逆説がここにあります。その豊かさが10、11節で繰り返されます。「主を恐れ

る人には何も欠けることがない」「主に求める人には良いものの欠けることがない」つまり満たされている。豊かだということです。自分を譲れず、相手の立場を理解できないことは偏りがあり、そこには人間の貧しさしかないけれども、自分を貧しくして、相手に共感することによって見えてくる新しい世界がある。相手を知る豊かさ、そこに本当の豊かさがあることを聖書は教えています。

この共感ということ言えば、朝の連続ドラマを観ておられる方々も多いと思います。わたしは近年になく内容の深い物語になっていると思って観ています。物語に深みを与えているのは、やはりキリスト教の信仰が根底に流れているということではないでしょうか。特に戦争の時代のこと、焼け跡で讃美歌496番「うるわしのしらゆり」が歌うところや、長崎の鐘の永井隆先生のシーンは印象的でした。ドラマのキリスト教考証は立教大学の西原廉太先生がされていますが、おそらく史実に基づき、またしっかりした信仰の裏打ちがあつて物語が構成されていると思います。主人公である福島県出身の作曲家古関裕而（ゆうじ）自身が信仰を持っていたかどうかはわかりません。ただクリスチャンであつた妻の影響は少なからず受けているでしょう。そして改めて彼の作曲した曲が歌詞と合つて人々の心に響くものになっていることを感じました。それはドラマでもありましたように、古関が曲を作る際にその場所に行き、その詩に深く共感していることです。『長崎の鐘』では長崎に行き、永井先生に会い、『栄冠は君に輝く』では甲子園に行く。そしてその詩を書いた人の気持ちや、場所に触れていく。戦争の前線に行ったこともそうでしょう。そのように相手の立場に身を置くこと。共感することで、見えてくる世界がある。古関の曲が人々の心を打つのはそういう共感性にあると思います。

社会は分断され、なかなかお互いが歩み寄り、共感することが難しい。けれどもこの共感性、へりくだりを神さまは身をもってわたしたちに示してくださいました。

「何事も利己心や虚栄心からするのではなく、へりくだって、互いに相手を自分より優れた者と考え、めいめい自分のことだけでなく、他人のことにも注意を払いなさい。互いにこのことを心がけなさい。それはキリスト・イエスにもみられるものです。キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした」（フィリピ2：3～8）

わたしたちが自分を貧しくして相手の立場に身を置くことを可能にするのはこのキリストによる以外にありません。わたしたちのためにご自身をへりくだらせ、貧しくなられた。そしてわたしたちと同じ真の人となられ十字架で死んでくださった。このキリストに結ばれて、その命を受けてわたしたちもそのように生きる者へと新しくされるのです。そこにわたしたちの豊かさがあります。聖書が示す豊かさは、自分を貧しく、へりくだらせて相手のことを慮る心です。そこで人はお互いに豊かにされるのです。まずはこの礼拝から、わたしたちから始めていきましょう。